



2026年8月14日
開智国際大学
山本 勝治

学習者間での協働的な学びと「学びのための評価」の有効性 ～DP Historyの授業実践とIB教員養成を通して～

はじめに

私は前任校の東京学芸大学附属国際中等教育学校においてDP HistoryやTOK等を担当し、教職大学院IB教員養成特別プログラムの院生の指導にも関わっておりました。また都留文科大学国際教育学科非常勤講師としてIBECの授業の一部（IB DP History）を担当するとともに、IBENの業務としてDP Historyのワークショップリーダーの役割も担っております。DP生への授業実践とIB教員養成の両方の経験からあらためて強く感じるのは、なぜIBでは学習者たち自身による「主体的・対話的な学び」によって「深い学び」が実現しているのか、それはIB教育の様々な枠組みが効果的に機能しているからなのではないか、という点です。「当初から、広い意味で構成主義的な生徒中心のアプローチを採用し」¹てきたDPの授業では生徒たちが、大学では学生たちが、ワークショップでは参加者の教員の方々が、指導者から教わったことを理解するというよりも、自分たち学習者間で議論しながら自ら知を構成していくことによって、学びを深めたり広げたりしているのです。

それでは、IB教育の指標はどのように探究的な学びを促しているのでしょうか。4つのプログラムや教科等の違いをこえて共通する枠組みとして、「IBの学習者像」「学習のアプローチ（Approaches to learning, ATL）」「指導のアプローチ（Approaches to teaching, ATT）」等があります。いずれもIB教育だけに特化したものではなく教育全般に通じるような汎用性のある指標であるといえますが、IB教育では児童生徒も教員もこれらを共通言語として振り返りや評価等において活用することで、学びの成果と課題を可視化し、次の学びに発展させています。本稿では、ATTの6つの主要な教育原理のうち「4. 効果的なチームワークと協働を重視する指導」と「6. 評価を取り入れた指導」に焦点を当て²、これらの原理がどのように探究的な深い学びを促し、自律した生涯学習者を育てているのか、DP Historyの事例を通して具体的にみていきたいと思います³。

DP Historyにおける探究を促す「問い」の特徴とマークバンド（採点基準表）

DP Historyには最終評価の対象として4種類の評価課題（3種類の最終試験と「歴史研究」）があります。そのうち「議論を評価する」スキルの習得に焦点を当てる「地域研究」（試験問題3）では、最終試験において次のような設問が出題されます。下記は『試験見本』⁴に掲載されている一例です。

「1949年から2020年までの間、中国とアメリカ合衆国は常に緊張関係にあった」。このものの見方についての程度同意するかを述べなさい。

上記の例に限らず、設問の多くは「どの程度同意するかを述べなさい」という指示になっています。このような「問い」に適切に答えるためには、提示されている「ものの見方」以外の「ものの見方」も複数取り上げ、それぞれについて歴史的な評価を加え、比較したり関連付けたりしながら生徒自身が歴史的な議論を展開し、「どの程度同意するか」の判断を示さなければなりません。判断の根拠を明示することも必要となります。生徒も一人の歴史家として、歴史的な意義を評価し、歴史的な重要性を判断することが求められています。そして、このような議論を促すべく、マークバンド（採点基準表）では最高レベルの評点13-15点が次のように説明されています⁵。

13～15	- 設問の議論についての深い理解を示している。 - 議論についての多岐にわたる複数のものの見方を詳細かつバランスよく評価している。 - 評価と一貫性があり、裏づけのある判断を提供している。
-------	--

学習者間での協働的な学びとマークバンドの活用

マークバンドで示された評価目標に向けて、授業ではどのような学習活動が展開されるのでしょうか。私の授業では、各単元で最終試験のような「問い」を示し、「複数のものの見方」のそれぞれについて生徒にペアやグループで分担させ、生徒たちは担当した「ものの見方」から「問い」にどのように迫れるのか、発表します。発表準備の際には「問い」の文脈に対応するように内容を精選して取り上げるよう生徒に指示しました。そして発表後は質疑応答と教員による補足説明よりも、発表された様々な「ものの見方」を使って全体で議論することに多くの時間をかけました。テーマによっては模擬国際会議や模擬討論番組としてロールプレイをさせたこともありました。

もちろん最初から協働的な学びがスムーズに展開されるわけではありません。DPが始まったばかりの高2の1学期の授業では内容を整理したにすぎない発表もみられ、浅い議論に留まります。内容の精選がなされずに「問い」に対応した議論となりにくくなったり、議論に必要な内容が不足していて深い議論にならなかったりする場合もあります。しかし、生徒は自己の学びを繰り返しマークバンドに即して分析することにより、自らの学びに関する課題を可視化し、改善に向けた見通しを持つことができるようになっていきます。例えば「複数のものの見方を詳細かつバランスよく評価」するためにはどのような内容やスキルが足りなかったのか、概念をどのように意識すべきだったのか、振り返って考えます。校内の定期試験等では、生徒がマークバンドと照らし合わせて自らの答案を分析的に振り返ることができるようにコメントを付して返却していました。このようにマークバンドを「学びのための評価」として活用して試行錯誤を繰り返すことにより、生徒は2年間のDPの学びを通して徐々に歴史学の方法論やものの見方を身に付け、DP生同士で協働的に深い議論を展開することができるようになっていきます。議論が深まると充実感がうまれてきます。そして、知識受容を中心とした学びから知識活用を中心とした学びに、徐々に転換していくのです。授業での協働的な学びの成果を共有し、各自がそれを活用することで、「議論を評価する」ことができるようになっていくのです。

IB教員養成における留意事項

大学生や大学院生を対象としたIB教員養成の授業においても、IBワークショップにおいても、学生や先生方の間での議論を通して新たな気づきが生まれ、学びが深まっていきます。「効果的なチームワークと協働を重視する指導」が、「積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけ」（「IBの使命」）ることになるのです。IB教員養成の場が児童生徒を対象とした授業のモデルとなるべく、担当者は学習者間で協働的な探究が促されるような学習課題を設定し、適切にファシリテーションすることが重要になってきます。担当者が教えることよりも、参加者同士の気づきや疑問を活用して知が深まったり広がったりするように留意します。また、授業の最後に各自で振り返りをまとめ、それを次時の最初に参加者間で共有して話し合う場を設けるようにしています。このような振り返りの場の有効性については、現本務校におけるIB教員養成ではない教職課程の授業においても活用しており、学生からも好評です。

ところで、先日7月31日～8月2日に開催されたIBワークショップでは、大山達也先生（大阪府立水都国際中学校高等学校）と共に二人でDP Historyのワークショップリーダーを担当しました。上記のことに留意しつつも、参加されていた先生方がお持ちの様々な困り事が気になり、最後に私たちが疑問に答える場を設けるべきか思案しておりました。それに対して大山先生は、「短時間であっても参加者同士が活動を振り返り、話し合う時間を設けることで、参加者が達成感をもってワークショップを終えることにつながるのではないか」と提案してくださいました。まさにその通りでした。

1,2：IB機構（2024）『DP「指導のアプローチ」と「学習のアプローチ」』

3,5：IB機構（2026）『DP「歴史」指導の手引き（2028年第1回試験）』

4：IB機構（2026）『歴史 上級レベル (HL) 標準レベル (SL) 試験見本（2028年 第1回試験）』